

おだやかな革命 「これからの時代の『豊かさ』を問いかける」

映画監督
渡辺 智史



これまでの、成長・拡大を求める経済のあり方とは違う、それぞれの地域の「幸せな経済」が全国で生まれつつある現在。大きなシステムに依存せず、自らの暮らしを支えるエネルギーを自治しながら、「あたり前」にあったはずの、本当の豊かさを取り戻していく姿を描いた映画『おだやかな革命』が全国で公開されている。原発被害の残る福島県飯館村、移住者の絶えない岐阜県郡上市・石徹白、岡山県西粟倉村の取り組みなど全国5カ所取材している。エネルギー自治から始まる、これからの暮らしの「豊かさ」を静かに問いかける物語。

私は山形県の日本海側にある城下町・鶴岡市を拠点に地域性の濃いテーマでドキュメンタリー映画を制作してきた。前作の映画「よみがえりのレシピ」は、大量生産、大量消費の現代社会において忘れ去られた伝統野菜のタネを守る農家の物語だ。収量が少なく、病気にも弱いという理由で忘れ去られた伝統野菜に関する映画だ。現在は品種改良された野菜が圧倒的に主流で、収量が少なく、病気に弱い伝統野菜は流通に適さないと

されてきた。昔懐かしい味や香りが愛おしいと、誰も栽培しなくなった伝統野菜を大事に守り続けてきた農家の思いに共感して集まったシェフ、大学教授や新規就農した農家が織りなす「食のコミュニティ」が誕生する姿を描いた。全国300箇所以上で上映され、海外の映画祭でも招待上映された。私自身は「よみがえりのレシピ」の撮影のために、東京から戻り故郷を拠点に映像制作を始めることになった。それまでは、ドキュメンタリー映画を作り、全国に配給するとなると首都圏で仕事することが常識だったが、今ではネットや流通の進歩によって、地方で仕事することも難しくなくなってきた。より積極的な理由を見出すとすれば、地域に暮らしていると、地域が抱える課題をよく理解できる、それが次回作の映画の企画につながる人が多い。全国各地で抱えている地域課題の多くは共通していることもあり、地域課題を掘り下げた映画は、他の地域でも観てもらえるチャンスがあるのだ。

かつては限界集落という言葉が盛んにメディアで叫ばれていたが、ここ10年ほどで農村には穏やかな変化の兆しがあった。「よみがえりのレシピ」に登場する若者は、実家に代々伝わる在来種の芋の栽培を継承するため、退職して新規就農した。そして今では芋だけでなく、栽培の担い手がなくなった親戚のリンゴ畑を受け継ぎ、芋もリンゴも事業として成功している。それまで都会にだけ目を向けて来た若者たちが、確実に地域やローカルを意識し始めている。山形という場所で撮影をして来た中で見えて来た、地域の変化の兆しが、今回の映画『おだやかな革命』の企画の原点となっている。

最初に取材に行ったのは、ご当地エネルギー協会の会長である会津電力の代表取締役社長の佐藤彌右衛門さんだった。ご当地エネルギー協会の宴席でも、会津の民謡を挨拶がわりに歌うなどする姿をみて、その人柄に引き込まれていた。「水も食料も文化もあるから、会津は十分に自治できていると思っていたが、あの3・11の時にエネルギーのことを忘れていたことに気付かされた。」と、そして「会津地方は千葉県と同じ面積で、森が豊かで、水も豊富だ。しかしその水をダムに貯めて作られた電気は、ほとんど

が首都圏に送られていた。その電気は原発5基分に匹敵するほどの量だった。」と熱く語る、彌右衛門さんの姿があった。

大和川酒造店は、お米も農業法人を立ち上げ自社米を作り、酒造りに徹底的にこだわって来た。そして、3・11をきっかけにして、仲間と起業をしてエネルギー自治へと深化して行くことになる。会津電力の出資者は地元の銀行と市町村や企業や個人で、その6割が福島県内の出資者であることから、会社の利益はその出資者を通じて地域へと還元されていくことになる。そのような地域主体の市民電力による動きは、これまでの企業誘致を競い合うような地域の姿とは決定的に違う。無い物ねだりではなく、地域にある資源で事業を起こすことができ、さらに生まれた利益を地域の中で還流していく。会津電力は現在、太陽光発電所が70ヶ所、合計出力は約5200キロワット（一般家庭約1700世帯分の電力）になっている。

これまで福島の問題は、政治的なイデオロギーの問題として語られることが多かったが、この映画ではそのようなイデオロギーとしてのエネルギー問題ではなく、これまでの経済成長を追い求めてきた時代が見失った本当の「豊かさ」とは何かを問いたかった。食料もエネルギーも、そして若者も全て経済成長の名の下に、都市部へ流れ込んで行っ

たという時代は、福島に限らず、全ての地方に当てはまる。これまでの時代の社会的な構造を、エネルギー自治という形で、ゆっくりとじわじわと氷が氷解するように変容していく、まさにその動きは「おだやかな革命」と言えるのではないか。



映画「おだやかな革命」

「あらずじ」3・11の原発事故を一つのきっかけにして、これまでの成長・拡大を求める経済のあり方とは違う、それぞれの地域での「幸せな経済」が全国で生まれつつある。『おだやかな革命』は、大きなシステムに依存せず、自らの暮らしを支えるエネルギーを自治しながら、本当の豊かさを取り戻していく地域の姿

を見つめた物語だ。2年にわたり追い続けたのは、原発事故後に福島県の酒蔵の店主が立ち上げた会津電力。放射能汚染によって居住制限地域となった飯館村で畜産農家が立ち上げた飯館電力。岐阜県にある100世帯の小さな集落が立ち上げた小水力発電事業。さらに、首都圏の消費者と地方の農家、食品加工業者が連携して進めている秋田県の市民風車。そして、自立を目指して村の森を再生しながら森林資源を生かしたビジネスを起こし、若者の起業家を集めている人口1500人の西栗倉村の取り組み。「当たり前の日常」が今日も当たり前であることの難しさに直面しながらも、そこから逃げて向き合った彼らの「暮らしの選択」が、穏やかに地域を変えていく。映画に登場するこれらの地域の暮らしの選択には、これからの時代の希望のタネが詰まっていた。

【映画情報】ナレーション…鶴田真由一製作…いでは堂一監督…渡辺智史一撮影…佐藤広一編集…渡辺智史一音楽…鈴木治行一MA…中野坂上スタジオ一アドバイザー…高橋真樹一特別協賛…一般財団法人ふくしま自然エネルギー基金一上映時間…100分一カラー一現在、地域の市民や行政が主催で上映する自主上映が全国で200箇所を超えて広がっています。

映画にも登場する中山間地域の自治会単位でも上映できるよう小規模上映も案内しています。詳しくはぜひ、こちらのHPをご覧ください。映画HP <http://odayaka-kakumei.com/>